

## 意味的観点からみた構文研究

著者	LEE SUNHUA
号	19
学位授与番号	268
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/37063">http://hdl.handle.net/10097/37063</a>

LEE  
李

SUN  
仙

HUA  
花

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 268 号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学位論文題目	意味的観点からみた構文の研究 —関連する構文との対照を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 齋藤 倫明      教授 小林 隆 准教授 大木 一夫 准教授 名嶋 義直

## 論文内容の要旨

本研究では、意味的観点に基づいて、関連する構文との関係を解明しようと試みた。その方法として、「てもらう」文と受身文を中心に上げ、関連性が高い構文との関係を検討した。次のようにまとめられる。

### 第2章 「てもらう」文の意味的分類

主語の意志の有無、主語の意志と相手の意志の強弱程度によって、「てもらう」文の意味的分類を行い、恩恵性の強弱程度も示した。

- 1) 「てもらう」文の意味は、主語の意志の有無、主語の意志と相手の意志の強弱関係により大きく4つのタイプに分けられる。i) 主語の人物が相手に強制的に働きかけて相手の行為を実現させる使役的「てもらう」文、ii) 主語の人物が相手に依頼して相手の行為を実現させる依頼的「てもらう」文、iii) 主語自身の行為の実現において相手の許可を求める形式的許可の「(さ)せてもらう」文(さらに、間接受影の「(さ)せてもらう」文、許容の「(さ)せてもらう」文、原因の「(さ)せてもらう」文に下位分類される)、iv) 相手の行為が一方的に主語のほうへ行われる受身的「てもらう」文に分けられる。使役的「てもらう」文、依頼的「てもらう」文、間接受影の「(さ)せてもらう」文、許容の「(さ)せてもらう」文においては、主語の意志が関わり、述べた順番に主語の意志が弱くなる。原因の「(さ)せてもらう」文と受身的「てもらう」文においては主語の意志が関わらない。
- 2) 恩恵性の強弱関係は主語の意志の強弱関係と相反する傾向が見られる。相手のほうから一方的に行

為が行われ、その行為を恩恵として受け入れる受身的「てもらう」文の恩恵性が最も強い。次は、主語の意志と相手の意志の相互関係で行為が実現される依頼的「てもらう」文の恩恵性が強い。主語の人物が強制的に働きかけて相手の行為を実現させる使役的「てもらう」文は依頼的「てもらう」文より恩恵性が弱い。形式的許可の「(さ)せてもらう」文は恩恵性においても形式的傾向があり、恩恵性が最も弱い。

### 第3章 「てもらう」文の成立度と働きかけ性

名詞句と動詞の関連性に基づいて、「てもらう」文の成立度と働きかけ性の強弱について考察した。

- 1) 「てもらう」文の成立度においては、名詞句の性質と動詞の性質が関わる。名詞句は有情物であり、動詞は①他動詞である②他動性が低い有対他動詞に対応する有対自動詞である③意志動詞であるという条件を満たせば、「てもらう」文の成立度が高くなる傾向がある。
- 2) 「てもらう」文の働きかけ性は、要求応諾性、他動性、名詞句の上下関係、補文の不利益な要素含意有無によって基本的に決まる。働きかけ性が関わない「てもらう」文が成立しやすい条件は、①要求応諾不自然動詞が使われる②他動性が低い動詞が使われ、主語が相手より下位であり、補文に不利益な要素が含まれていないという三つの条件を満たす場合である。働きかけ性が関わる「てもらう」文が成立しやすい条件は、要求応諾動詞が使われるか、働きかけ性が関わない「てもらう」文になる②の条件の中、一つでも欠ける場合である。

### 第4章 「てもらう」文と「てくれる」文

「てもらう」文と「てくれる」文において、参与者の特徴と恩恵性、話し手の視点と恩恵性、動詞の性質と文の意味との関連性を総合的に捉え、その関係を示した。

- 1) 「てもらう」文と「てくれる」文においては、行為の与え手と行為の受け手の性質が異なる。「てもらう」文では基本的に行為の与え手と行為の受け手が人間でなければならないが、「てくれる」文は行為の与え手が無情物でも成立し、行為の受け手が存在しなくても成立する。これは恩恵の認識者の違いによるものであるが、「てもらう」文では行為の受け手が恩恵の認識者であり、「てくれる」文では話し手が恩恵の認識者であるからである。従って、「てもらう」文では、行為の受け手が恩恵として認識できる人間でなければならないが、「てくれる」文では、話し手が恩恵的に認識できる事態なら成立するのである。
- 2) 参与者の特徴や恩恵の認識者の違いにより、非対格動詞の成立可否も説明できる。「てくれる」文で話し手は、非対格動詞が表す事態、すなわち、自然発生的な出来事や状態を恩恵として受け入れることができるが、「てもらう」文で行為の受け手は、人間を代表とする有情者の行為でなければ恩恵として受け入れることができない制限があるので成立しない。
- 3) 動詞を要求応諾動詞と要求応諾不自然動詞に分けて、「てもらう」文と「てくれる」文の働きかけ性をみると、その特徴を有効に説明できる。要求応諾動詞が「てもらう」文に使われると働きかけ性が関わる場合と働きかけ性が関わない場合が成立するが、要求応諾不自然動詞が「てもらう」文に使われると働きかけ性が関わない場合しか成立しない。働きかけ性が関わない「てもらう」文は「てくれる」文と意味的に近くなる。
- 4) 働きかけ性が関わない受身的「てもらう」文と「てくれる」文において、話し手が行為の受け手である場合は、恩恵の認識者が話し手であるという共通点があるので、意味的に非常に近くなる。このような場合両構文の違いは、視点と関わる恩恵の評価領域の違いで説明できる。「てもらう」文は行為

の受け手に視点があるので、受け手の立場を評価する表現と共起しやすく、「てくれる」文は行為の与え手に視点があるので、与え手の行為を評価する表現と共起しやすい。

## 第5章 「てもらう」文と受身文

### 1) 受身文の再検討

受身文を、直接受身文と間接受身文に分けて意味を考察すると、統語的観点と意味的観点の対応関係が明確である。このとき、持ち主受身文は直接受身文に入れたほうが、意味的特徴を有効に説明できる。

(1) 間接受身文は構造からくる〈迷惑性〉を帯びる受身文であり、文構成要素の語彙的意味に左右されず、常に〈迷惑性〉を帯びる。

(2) 直接受身文は、文構成要素の語彙的意味に左右される受身文である。すなわち、語彙的意味において、利益的要素が有ると〈恩恵性〉を帯びる傾向があり、不利益的要素が有ると〈迷惑性〉を帯びる傾向がある。

(3) 持ち主受身文は対応する能動文の持ち主が受身文の主語になるものなので、ノ格を対応する格として認めた場合、能動文との対応関係が考えられる。また、文構成要素の語彙的意味に影響される。このような点から、持ち主受身文は直接受身文と共通的に捉えられるので、持ち主受身文を直接受身文として考えたほうが、受身文の意味を有効に説明できる。

(4) 〈中立性〉を帯びる受身文というのは影響性が関与しない受身文であり、降格受動文や属性叙述受動文、発生状況描写タイプの受身文でいえる性質であると考える。直接受身文の中、これらの受身文を除いた範囲で、「てもらう」文と意味的共通点が考えられる。

### 2) 「てもらう」文と受身文の交換可能性

直接受身文と「てもらう」文の共通点と相違点に基づいて、両構文の交換可能性を考察した。

(1) 「てもらう」文と受身文の成立において名詞句の性質は「てもらう」文のほうが制限される。「てもらう」文においては、名詞句に無情物がくる場合は成立しない。

(2) 「てもらう」文と受身文の成立可否は三上氏の能動詞対所動詞という分類に基づく有効に説明できる。所動詞は「てもらう」文と受身文が両方成立しない。動詞の成立においても「てもらう」文のほうが受身文より制限されるが、能動詞の中意図非対応感情動詞は「てもらう」文が成立しない。

(3) 「+恩恵動詞」「±恩恵動詞」「-恩恵動詞」という分類と要求応諾動詞対要求応諾不自然動詞という分類を併用すると「てもらう」文と受身文の意味的特徴を有効に説明できる。「+恩恵動詞」であり、「要求応諾不自然動詞」であれば両構文は意味的に近くなる。

(4) 「てもらう」文と受身文の交換可能性は名詞句と動詞の性質に基いて説明できる。名詞句は有情物であり、動詞は要求応諾性が弱いほど利益的な要素が強いほど交換可能性が高くなる。

## 第6章 働きかけ性が関わる「てもらう」文 —使役文との関係から—

働きかけ性が関わる「てもらう」文においては、その働きかけ性の強弱程度が左右される要因として、客観的、主観的・状況的要因が考えられる。

### 1) 客観的要因：動詞の他動性、名詞句の上下関係

他動性が高い動詞が「てもらう」文に用いられると名詞句の上下関係に左右されず依頼的「てもらう」文になる。依頼的「てもらう」文は働きかけ性が弱いので、使役文とは強制性の度合の差が明確である。一方、他動性が低い動詞が「てもらう」文に用いられると働きかけ性は名詞句の上下関係に左右

される。この場合は、主語が相手より上位なら使役的「てもらう」文になり、主語が相手と同等か相手より下位なら依頼的「てもらう」文になる。使役的「てもらう」文に解釈される場合は、使役文と働きかけ性が近似し、両構文における強制性の度合の差は大きくない。

## 2) 主観的・状況的要因

「てもらう」文の働きかけ性は客観的要因の他、主観的・状況的要因も関わる。主語が相手に強制的に働きかけられる立場でも主語の意図により強制的にも依頼的にも働きかけられる。また、周辺状況から強く働きかけられない場合もある。

## 第7章 意味からみた受身文の新しい分類

日本語における受身文の意味的研究の二つの流れ、すなわち、〈迷惑性〉が関わるか否かに注目した研究と〈影響性〉が関わるか否かに注目した研究を補い合い、受身文の意味を有効に説明できる新しい分類を試みた。まず、受影者の有無を基準にして影響受身文と中立受身文にわけて、影響受身文はさらに恩恵受身文と迷惑受身文に下位分類した。

1) 影響性が関わる影響受身文において、影響性の認定は受影者の存在に基づく。受影者には、顕在的受影者が存在する場合と潜在的受影者が存在する場合がある。

顕在的受影者が存在する受身文において、主語と二格の特徴は「i) 主語が有情物であり、二格は動作主性を帯びる ii) 主語が有情物であり、二格は原因的性質を帯びる」という特徴をもつ。即ち、動作主や原因(二格表示必須)を二格で表示することが可能である。

潜在的受影者が存在する受身文において、潜在的受影者と二格との関係、二格の特徴は i) 「所有者—所有物」であり、二格名詞句が動作主である、ii) 「非所有者—関連物」であり、二格名詞句が動作主である、iii) 「所有者—行為」であり、二格名詞句が動作主である。但し、i) ii) iii) は顕在化テストにパスすることが前提される。

2) 影響性が関わらない中立受身文は受影者が存在しない。主語は基本的に無情物であり、動作主は二格で表示されない。動作主を二格で表示できる影響受身文とは明確な違いであり、影響性が認められない客観的な根拠になる。

中立受身文において、動作主をめぐる文法的特徴は次のようにまとめられる。i) 動作主が不問になる(①動作主が背景化される場合と②動作主が非問題化される場合がある)、ii) 動作主が存在しない、iii) 動作主性が希薄(属性)である。i) ii) は自動詞文と共通する特徴であり、iii) は名詞述語文や形容詞述語文と共通する特徴である。

3) 影響受身文において、意味の内実は〈恩恵性〉と〈迷惑性〉であり、その内実の違いにより恩恵受身文と迷惑受身文に下位分類される。受影者が恩恵を受けるか迷惑を受けるかということは構造的意味と事象の語彙的意味に左右される。恩恵受身文において〈恩恵性〉の内実は事象の語彙的意味からくる影響であり、迷惑受身文において〈迷惑性〉の内実は事象の語彙的意味からくる影響と構造的意味からくる影響という二種類がある。

## 第8章 反使役化自動詞文と受身文との関わりについて

自動詞文と受身文との意味的関連性は、動作主前提性と影響性との関わりで、有効に説明できる。動作主二格表示や意図副詞共起のような統語的観点は意味を説明するための一つの手段に過ぎない。

1) 事態変化において、対象物の内在的性質や静的な原因・手段、第三者無動作主が関わる場合、要因が不明である場合は自動詞文しか成立しない。これらの要因が関わる場合は、動作主前提性がなく、

影響性も関わらない。

- 2) 事態変化において、二格動作主、二格自然現象(動作主的用法)、意図副詞からわかる動作主、必須動作主が関わる場合は受身文しか成立しない。これらの要因が関わる場合は、動作主前提性が高く影響性が関わる傾向があるが、影響性の度合は潜在的受影者の想定可否に左右される。すなわち、潜在的受影者が想定しやすいと影響性は強くなるが、潜在的受影者が想定しにくいと動作主前提性が高くても影響性は弱くなる。このように、自動詞文と受身文はそれぞれ固有の領域において、動作主前提性と影響性の特徴が明確に異なる。
- 3) 事態変化において、非必須動作主や自然現象(二格動作主的用法を除く)、動的原因・手段が関わる場合は、自動詞文と受身文が意味的に近くなる。受身文は、動作主前提性が低くなり影響性も弱くなるため、自動詞文に接近し、置き換えられる。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、「第1章 序論」、「第2章 『てもらう』文の意味的分類」、「第3章 『てもらう』文の成立度と働きかけ性－名詞句と動詞の関わりから－」、「第4章 『てもらう』文と『てくれる』文－成立条件と恩恵性を中心に－」、「第5章 『てもらう』文と受身文」、「第6章 働きかけ性が関わる『てもらう』文－使役文との関係から－」、「第7章 意味からみた受身文の新しい分類」、「第8章 反使役化自動詞文と受身文との関わりについて」、「第9章 結論」の全9章からなる。内容的には、第1章・第2章～6章・第7～8章・第9章の4つに分かれる。

第1章は、本論文の目的が、「てもらう」文と受身文とを取り上げ、意味的観点から関連構文と対照させることによってそれぞれの意味的特質を明らかにする点にあること、及び、意味的観点として、「てもらう」文の場合には「働きかけ性」と「恩恵性」、受身文の場合には「影響性」を取り上げること、の2点を明確にしたうえで、両構文の意味と関連構文との関わりに関する先行研究について論じたものである。

第2章～6章は、「てもらう」文を対象とし、以下の点について論じたものである。「使役的『てもらう』文」「依頼的『てもらう』文」「受身的『てもらう』文」といった「てもらう」文の意味的分類(第2章)、要求応諾動詞・要求応諾不自然動詞、動詞の自他といった動詞の分類から見た「てもらう」文の成立度(第3章)、「てくれる」文との関連性(第4章)、受身文との関連性(第5章)、使役文との関連性(第6章)。

第7～8章は、受身文を対象とし、以下の点について論じたものである。受影者の有無による「影響受身文」(これは更に「迷惑受身文」と「恩恵受身文」とに分かれる)と「中立受身文」といった受身文の意味的分類(第7章)、「壊れる－壊される」「外れる－外される」といった対に見られる反使役化自動詞文と受身文との関連性(第8章)。

第9章は結論として、本論文の各章のまとめを記したものである。

本論文は、「てもらう」文と、同じ授受構文として関連性の深い「てくれる」文、働きかけ性の強弱の点から関連性を有する使役文・受身文とを取り上げ、また、受身文と動作主前提性および影響性の点で関連性の深い反使役化自動詞文とを取り上げ、それぞれを対照させることにより、従来、あまり論ぜられることのなかった「てもらう」文と受身文の意味的特質を明らかにしたものであり、現代日本語学の構文研究として高く評価することができる。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。